

# KCELS

## Newsletter No. 1 MARCH 1986

### KCELS 10周年によせて

本 城 智 子

早いもので、私達の英文学会が発足してから10年が経過しました。10周年記念ということで、もう少し足もとをかためるべく会則をつくり、このような Newsletter も発刊することになりました。10年前は、「時期尚早」の感なきにしもあらずだったのですが、push してはすみをつけて下さった諸先生に感謝の意を表したいと思います。

出来たものを維持するだけでもある程度のエネルギーがあります。形骸化させることなく育てるためには、更に大きなエネルギーを要します。そのエネルギー源として、一人でも多くの卒業生が参加して下さいますよう願わずにおれません。また、青山学院の英文学会では、学部二、三年生もプログラムに参加しておられるようです。在校生の皆さんも、「自分達の学会」という意識をもって、積極的に参加して下さい。学会を、お互いの切磋琢磨、研鑽の場として大切に、一歩一歩着実な歩みを続けたいと思います。

### ■特別講演(要旨)■

#### 「マーク・トウェイン—自然児の運命」

東京大学教授 亀 井 俊 介

アメリカは広大な荒野に文明を築いてきた国である。アメリカ人は原初的な自然に憧れるかわら、その自然の無法性を恐れ、秩序ある文明を求めるといふ、矛盾したふたつの価値感の間を行き来してきた。そういう矛盾を背負いながら、なおかつその間に調和を見出し、自由な人間の境地を確立する可能性を探求することが、アメリカの文学者の重大な関心事であり続けてきたように思われる。

1885年に出版されたマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』は、まさにこの自由の探求を、生き生きとした日常的な表現でなかで、徹底して追求してみせた作品である。主人公のハックは、生まれながらの裸一貫、自分の力のみで頼って生きようとする子供という意味で、自然児である。彼は自分を養子にしてくれたダグラス未亡人の堅苦しい生活、つまり文明の秩序



に堪えられない。それで無法な父親に誘い出された時、それをむしろ楽しんでいる。だが、やがてこんどは、その自然のままの生活にいのちの危険をすら感じるようになる。こうして彼は父親からも脱走するのだが、それは自然が内包する無法な獣性からの脱出を意味する。ハック・フィンのこういう文明と自然との両方からの脱出は、『トム・ソーヤの冒険』におけるトムの家出のような、帰還を前提としたものでなく、いのちがけの脱走である。

ハックの冒険は、ジャクソン島で逃亡奴隷のジムと出会ったことで、一層重要な意味をもって来る。ミシシッピ河を舞台に、世の中のことを何も知らぬ無垢な白人少年と、社会制度に苦しめられてきた黒人奴隷との筏の上での奇妙な共同生活が始まるのである。逃亡奴隷を助けることは地獄行と教えられていたハックも、ジムとのまじわりを通して、しだいに人間的な連帯意識の重大さを発見してゆく。そして自分とジムとをこのように一体化してとらえるようになることは、それまで漠然とした逃亡であったものを、いわば人間としての存在を賭けた自由の探求へと変化させてゆくのである。

マーク・トウェインは、このハックとジムに、ストーリーの展開上の無理を犯してまでも遮二無二 Deep South へと入り込ませる。それは、彼自身もよく知っているこの地方を体験させ、またそれと対決させることによって、ハックに文明と自然との重みを知らしめるためだっただろう。貴族的因襲が重んじられ、しかも同時に一般庶民は貧しく無知で群衆心理に身をまかせている Deep South は、文明と自然の恐ろしい部分が極端な形で共存する世界なのである。河を下るなかで、ハックは岸に上るごとにその恐ろしさをいやというほど知らされ、筏に逃げ帰ってくる。筏の上だけが彼とジムの Home で

あり、平和な自由の境地なのである。

人間ハックの成長は、この筏すら占領したパテント師たちが、自分の知らぬ間にジムを売却してしまった時に最も顕著になる。ハックはいったん、逃亡奴隷を助けたことへの反省から「良心」の呵責を覚え、ジムのことを持ち主に報告すべき衝動にかられるものの、迷いに迷ったすえ、人間としての「本能」の方を選ぶ。「よし、おれは地獄へ行く」と決心した上で、ジムの救出に出かけるのである。

無垢の少年を扱った作品では、一般的にあって、経験を積んで大人の知恵の世界の価値を知り、それを何らかの形で吸収してゆくことが、その少年の成長としてとらえられている。だがハックの成長はその逆である。彼は自由のために大人の知恵に背を向け、恐ろしい秩序や獣的な無秩序の世界、地獄の中へ挑戦していくのである。ここには、アメリカ社会に対する作者トウエインの irony が読み取れよう。

だが物語は、ハックの重大な決断によってではなく、元の持ち主の遺言でジムが自由にされたという皮肉な終り方をしている。しかもハックは、ジムを買った農家の女主人にまたもや養子にされそうだと知って、「インディアン地方」へ逃げ出さなくてはならなくなる。物語の振り出しに戻ったわけだ。いっさいは空しかったということにもなる。

では、ハックの自由の探求は無意味だったのだろうか。そうではない。ハックは自然と文明の間をさすらいながら、自己を貫き、自分を成長させた。この結果、敗北にいたったのだが、いいかげんな妥協をせず敗北にいたったことによって、自由を探求することの美しさを証明したのである。

ハックの旅は、アメリカ人の「心」の旅を代表したものだともいえよう。自由な存在を実現するという彼の夢はみだされなかったが、それはシャーウッド・アンダーソン、J. D. サリンジャー、ソール・ベローといった20世紀作家たちによって受け継がれてゆく。無垢な「自然児」の夢を探求する意欲の激しさが、アメリカ文学の魅力のひとつとなっているのである。

## ■研究発表（要旨）■

### 「相動詞における不定詞と動名詞の選択について」

堀 環

英語の相動詞は、動名詞または不定詞をその補文に取り得る。そのどちらを選択するかを予想するには、補文

にくる動詞の意味や文脈から生じてくる意味を考慮しなければならない。本発表では、動名詞と不定詞の両方を補文に取り得る begin, start, continue, cease について、補文選択に関与する意味的要素を調べてみた。

70余りの例文を10人の native speaker に示し、それぞれの場合に、動名詞、不定詞のどちらを好むか、チェックしてもらい、そのデータに基づいて考察した。begin, start, continue については、“point in time”つまり言及している時点において補文に表わされている行為または出来事が起こっていることを示すが、その前後における行為の継続性は示していない場合と、“generic”つまり補文が状態、習慣的行為、感情を表わす場合は不定詞が、そして“duration”つまり表わされている行為が言及されている時点前後で継続している場合と“repetition”つまりある行為が繰り返し連続的に起こる場合は動名詞が好まれるという結果になった。cease については、状態、感情を表わす時のみ不定詞が好まれ、その他はすべて動名詞であった。このように上にあげた4つの要素が関与していると考えられるが、これらすべての要素を同一レベルで扱うには無理がある。というのは、状態、感情は補文の動詞で決定されるが、その他のものは文脈が与えられないと生じないし、また、“repetition”や“point in time”の中には話者の判断という主観的要素に委ねられるものもあるからである。従って begin, start, continue における不定詞、動名詞の選択には、客観性のレベルに違いがある“point in time”, “generic”, “duration”, “repetition”という要素が関与しているといえる。

### 「フォークナーの『八月の光』論 ——元牧師ハイタワーの責任」

田中敬子

ウィリアム・フォークナーの小説『八月の光』の中で、リーナ・グローヴとジョー・クリスマスは、共に言葉と現実の落差という問題をかかえている。彼らはその問題を、それぞれなんらかの形でゲイル・ハイタワーの所へもちこむ。リーナは、結婚の約束をしながら自分を捨てたルーカス・バーチを追って旅をしているが、ハイタワーが元牧師と知ってルーカスとの結婚を彼にとりしきってもらえまいかと考える。しかしハイタワーには、いいかげんな言葉を使う男と身重の娘を一緒にしてやる力、すなわち言葉と現実を一つにする力はない。彼は言葉と肉体が一つになったイエス・キリストの伝道者であったにもかかわらず、言葉と現実を一致させることに関心がない。彼は町の人々が自分について勝手な噂話をするにまかせ、自らは南北戦争で亡くなった祖父の夢にひたっ

ている。彼は、噂話にみられるようにいいかげんな言葉がいかに有害で危険であるかに気づいているが、一方現実を把握できない言葉の無力さに絶望している。彼に信じられるのは過去の祖父の幻だけである。

これに対しジョーは言葉の絶対的権威を信じており、混血かもしれない現実の自分が黒人、白人という言葉でわりきれないのにいらだっている。彼は言葉によって現実をすべて支配できるという非人間的な考え方をしているが、それは幼い頃彼が形骸化した言葉を絶対視するキリスト教の下で育った事と大いに関係している。そしてそのキリスト教の一牧師として何もせず、言葉の無力さに早々と絶望してしまったハイタワーは、ジョーになぐり倒されるという皮肉な巡り合わせとなる。

ハイタワーは、牧師であった彼に全信頼を寄せるインズ夫人の願い通り、ジョーの為に偽証するが、その偽証もリーナのお産の手伝いも結局彼の言葉不信をくつがえすには至らない。ハイタワーは言葉に対する絶望故にリーナに対してもジョーに対しても救いの手をさしのべることはできず、また自らを救うこともできないのである。

## KCELS 10年の歩み

第1回大会：1976年11月5日(金)

特別講演・島田 謹二教授 (東洋大学)

「フランスにおける英文学研究」

研究発表・朝原 早苗

「揺れる世界—『アントニとクレオパトラ』の構造」

・平井 雅子

「D.H.ロレンス『息子と恋人』からその後へ」

第2回大会：1977年11月11日(金)

特別講演・今村 茂男準教授 (ミシガン州立大学)

「日本人は英語に弱いのか」

研究発表・稲田 依久

「中学校英語教育—神戸女学院の場合」

・森本 まゆみ

「小説における形の研究—ヘンリー・ジェイムズの『黄金の盃』について」

第3回大会：1978年11月10日(金)

特別講演・菅 泰男教授 (京都大学)

「日本と英文学」

研究発表・弓場 光子

「ドリス・レスリングの作品における社会と個人」

・朝日 千尺

「D.H.ロレンスにおける『花』の意味について」

第4回大会：1979年11月9日(金)

特別講演・大橋 健三郎教授 (東京大学)

「アメリカ小説と今日の文学」

研究発表・川越 栄子

「シェイクスピアの言語における複合語について」

・島津 展子

「T.S.エリオットの『一族再会』における意味の重層性」

第5回大会：1980年11月12日(金)

特別講演・Margaret Drabble 氏

「Lawrence, Hardy, and Bennett: Tragedy or Misery in the Novel」

研究発表・新野 緑

「『荒涼館』における時間」

・河野 桂子

「『東京の人』にみる『欲望という名の電車』の impact」

第6回大会：1981年11月6日(金)

特別講演・安東 伸介教授 (慶応大学)

「中世英文学における女性像」

研究発表・西条 智子

「『リトル・ドリット』における〈中年男性〉の progress」

・平出 則子

「ジョルジュ・サンドの『モープラ』とE・ブロンテの『嵐が丘』」

第7回大会：1982年11月12日(金)

特別講演・Doris Lessing 氏

「Contemporary British Novelists and Their Tradition」

研究発表・由本 陽子

「Semantics of Causative Sentences」

・相本 資子

「Time, Arch—Antagonist—エレン・グラスゴーの『ヴァージニア』」

・中村 仁美

「ヘンリー・ジェイムズの『ポイントンの戦利品』考—フリーダの得た宝物」

第8回大会：1983年11月25日(金)

特別講演・Philip Collins 氏

「Dickens and the Dramatic」

研究発表・長坂 佳子

『『ハムレット』における愛の回復——Queen  
主題をめぐって』

・林 なおみ

「Stephen Hero と『芸術家の肖像』にみ  
られる家族関係」

第9回大会：1984年12月7日(金)

特別講演・寺沢 芳雄教授（東京大学）

「英語訳聖書の伝統一言語と文体を中心に」

研究発表・中村 真由美

「中英語の非人称構文における主語について」

・堀江 珠喜

「パロデストとしてのオスカー・ワイルド」

## 会 則

### (1) 名 称

本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。

### (2) 目 的

本学会は本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。

### (3) 構 成

本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生有志および本学英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。

### (4) 会 費

正会員は年会費を納入する。

### (5) 活 動

年一回、英文学会を開催する。

Newsletter を発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。

その他。

## お 知 ら せ

亀井 俊介著『ハックルベリー・フィンは、いま』

1985年11月 ■ 講談社 ■ 1,200円

■ 特別講演の一部が収録されています。乞、ご購入。

出版

公演

ロンドン・シェイクスピアグループ公演

『ハムレット』 1986年12月3日(水) 2:30P.M.

## 編 集 後 記

卒業生のみなさんおめでとうございます。4月からは様々な職場で社会勉強を志す人、若い世代の英語教育に従事する人、また学究者の仲間入りをする人など、各々の人生を歩まれるのですが、在学4年間で学ばれた英米文学、英語学の知識を、また大学生活で修得されたものの見方、考え方を最大限に各々の仕事に活用させて欲しいと望んでいます。

神戸女学院の英文学会(KCELS)の年次大会も今年(1985年)で第10回を迎えました。「10年の歩み」に記しましたように、毎回、国内外の著名な学者、作家たちを特別講師に招聘し、英米文学、英語学の各分野で研鑽を積んでいる卒業生たちに研究発表の場を提供してきました。10周年を機にその実績を記録に残すため Newsletter 発刊の運びとなったわけです。

去る11月15日の第10回大会でご講演願った亀井俊介先生には、Newsletter 発刊の趣旨を汲んでくださり、快くご講演要旨をお寄せ下さいました。また二つの研究発表の「レジュメ」も掲載することにしました。次号からは、「講演要旨」「研究発表レジュメ」に加えて、さらにその内容を充実させていきたいと考えています。

また、その他英文学科主催の行事(特別講演やロンドン・シェイクスピア劇団の公演)の案内など会員の便宜を計り、母校とのパイプ・ラインの一つとして、あるいは会員相互の交流の場として Newsletter を役立てていきたいと考えていますので、多くの卒業生が入会されることをおすすめします。

### KCELS Newsletter 編集委員

(第10回 KCELS 準備委員)

・別府 恵子 ・泥谷 征人 ・平井 雅子  
・本城 智子 ・上 紀子 (ABC順)

写真撮影 林 和仁

### KCELS Newsletter No.1

編集発行 神戸女学院大学英文学会

西宮市岡田山4-1